

翻訳書で知る東南アジアの農村

高橋宗生

途上国各国において数多くの農村調査が実施され、報告書や研究書が多数出版されてきた。研究所図書館ホームページの蔵書検索画面で、フリーワードに「農村」、地域コードに東南アジア全体および各国を表す「AH*」、言語コードに日本語を表す「JPN」を入力し、当図書館が所蔵する東南アジア農村を扱う和書を探してみると、二〇〇タイトル以上の図書がみつかる。その中には、注目される海外の研究成果やルポルタージュなどの翻訳書も含まれており、日本語で外国人研究者の手による農村調査・文献調査の成果を読むことができる。その総数は多いとはいえないが、東南アジア農村のあまり知られていない姿がみえてくるかもしれない。ここではそれらの中から五冊紹介する。

J・デルヴェール著、石澤良昭監修・及川浩吉訳『カンボジアの農民 自然・社会・文化』（風響社 二〇〇二年）は、主に一九五〇年代に実施した農村調査を基に、カンボジア農村の自然環境、衣食住、生業形態、農業経営などを解

説している。「環境—カンボジア平原」、「農村の文化」、「住民と経済」、「農村社会」、「地方の生活」の計五部からなり、付録として統計を中心にした参考表、二五種の地図を収めた参考図、漁具、農具、家屋のイラスト他を収めた参考図版などが巻末に付く。本書は農村、農民に関する記述が詳細かつ正確で、農民の智慧を随所に見出せるところに特質があるといわれる。気候、地理、土壌、植生を扱う第一節に限らず、地理学者の観察眼を他の部にも感じることができ。東南アジア人文地理学の泰斗が著した不朽の名著としても知られており、八〇〇ページを越す大部の翻訳書となっている。

次に、タイ語を原典とするチャティブ・ナートスパー原著、野中耕一、末廣昭共編訳『タイ村落経済史』（井村文化事業社 一九八七年）をみていく。本書は一〇〇ページ余りの代表的論文に加えて小論三点とR・ランガの「タイ国土制度史」の一部を収録した翻訳書で、代表的論文名がそのまま書名となっている。その論文は古代村落共同

体の時代から説き起こし、後半は自給自足経済の中に商品経済が浸透し始める一九世紀後半から二〇世紀前半にかけての農村経済の変化に注目する。土地所有制度、国家と村落との関係などがどのように変化していったかを中部タイとそれ以外の地域とを比較して論じている。タイの村落経済の歴史的变化を知るには恰好の本であろう。

続いて、セロ・スマルジャン、ケンノン・ブリージール著、青木武信「ほか」訳、中村光男監訳『インドネシア農村社会の変容 スハルト村開発政策の光と影』（明石書店 二〇〇〇年）を紹介する。本書は開発独裁体制といわれたスハルト政権下で実施された様々な開発政策の農村社会への影響を、インドネシアの三州（アチエ、ジョクジャカルタ、南スラウェシ）で調査した報告書である。国家開発プログラムが農村コミュニティに及ぼした社会的、文化的インパクトを探ることに重点が置かれ、識字率向上キャンペーン、家族福祉運動、家族計画、協同組合運動などの実態を解説している。「家族プロフィール」と題した一一三章では、三州の農村に住む各々五七人の住民に対し

て詳しい聞き取り調査が行われている。ここ二、三〇年間の経済、社会、文化の変化を彼らはどう認識し、個々の生活がどう変わったかを知ることができ。同じく開発政策の農村への影響を扱った本として、サニッスター・エーカチャイ著『アジアの私たちの会話、松井やより監訳「語りはじめたタイの人びと 微笑みのおかげで」』（明石書店 一九九四）がある。本書はタイの三地域（東北部、南部、北部）にみられる政府、企業主体の開発と農民の惨状に関し、口語体の引用を使って実際に農民の口から語らせる手法で、開発が農村に及ぼす負の側面を描き出している。たとえば、自然林伐採とユーカリ植林、観光開発と住民立ち退き、投機家による土地買占めなどが実際にどのような結果をもたらしたかが叙述されている。農民や漁民の写真を多数収録し、彼らの立場に立つてタイの変貌を跡付けている。

最後に国内外の学界で大きな論争を呼び、多くの書評論文を残すことになった英文書籍の翻訳を紹介する。ジェームス・C・スコット著、高橋彰訳『モーラル・エコノミー 東南アジアの農民叛乱と生存維持』（勁草書房 一九九

九年）がそれである。本書はビルマ、ベトナムの両低地に焦点を当て、資本主義化前の農民が行動決定を行う際に、危険を回避し損失可能性を最小限化しようとするとは仮定する。続いて、農村内制度が生存危機から農民を保護するように機能していると仮定する。農民とその属する社会にはそれぞれ「安全第一」原則と「生存維持倫理」が働いているというのがスコットの基本的な考え方で、それらの仮説が植民地経済や農村政治の分析に応用されている。この「モーラル・エコノミー」論に反論を唱えたサミュエル・ポピンは、モーラル・エコノミストが注目する農民運動の道徳的推進論を批判し、政治的能力に注目した。自らの立場を「ポリテイカル・エコノミー」と呼び、先植民地期から革命初期に及ぶベトナム農村社会史を論じたポプキンの著作に関しては、「日本語版へのことば」の中で著者自らが短くコメントしている。

（たかはし むねお／アジア経済研究所図書館）